

アジア・太平洋地域における 新しい“複合文明”の可能性*

香 山 健 一**

要 約

1990年代を目前にして、アジア・太平洋地域は新しい文明史的発展の可能性を示し始めている。そして、その発展の極は大西洋地域からアジア・太平洋地域へとその重心を移動しつつある。

この新しい文明史的発展の可能性は、これまでのさまざまな型の単一文明（Mono-civilizations）の限界を超える諸文明の共存と複合という意味において、これを新しい型の、多様な“複合文明”（Poly-civilizations）あるいは“多重文明”（Muliti-civilizations）の誕生と呼ぶことのできるものである。

1980年代前半のアジア・太平洋地域は、先進工業国平均の2～3倍もの高い経済成長を持続している。そして、豪州、ニュージーランドなど大洋州諸国も次第にアジア・太平洋地域との相互依存関係を強め、米国もまたアジア・太平洋地域と経済的、文化的交流を深めている。

数世紀を越える長い停滞と混乱の時代を終えて、アジア・太平洋地域はいま1992年の欧州統合を契機として再活性化を目指す大西洋地域とあい携えて、これからの地球社会が必要とする、新しい第2の発展の極を形成しようとしている。この東と西の二つの発展の極を結ぶにあたり、決定的に重要な存在となるのは、多様性、開放性を兼ね備えたアメリカ合衆国である。そして、これからの日米関係は単なる二国関係の枠組みを越えて、従来以上にアジア・太平洋地域協力という、より広い枠組みのなかでさらに高次元のものに発展していく必要がある。

21世紀にむけての日本の役割は、非軍事経済大国という新しい型の平和文化国家の基本路線を堅持しながら、思い切った市場開放と内需拡大、経済・科学技術協力などを通じて、アジア・太平洋地域の新しい文明史的可能性の実現のために積極的に協力しつつ、この地域ならびに世界との新しい相互依存関係のなかに平和的に共存・共栄しようとするものでなければならない。

20世紀後半のアジア・太平洋地域における西欧文明と非西欧文明の活発な相互作用と反作用、複合、融合、浸透の動きは、近代産業文明の西欧的限界を越える、ある新しい型の「複合文明」の形成をもたらしつつある。それは特定の単一文明ではなく、多様な諸文明の最適「複合」からなるものである。

* 本論文は、本年6月6～7日に(社)研究情報基金主催で開催された「アジア・太平洋地域経済研究委員会コンファレンス」における「文化・社会面研究グループ」中間報告の報告書の一部である。

** 学習院大学教授

そして、アジア・太平洋地域の活性化、経済発展は在来型の工業化、近代化、西欧化によってもたらされたものではなく、こうした異質、多様なものの文明史的融合のエネルギーによるものであることを見落としてはならない。

日本は幸運な地理上の位置に助けられて、先に西欧文明の影響を受けた南アジア地域等のたどった悲劇的運命から教訓を引き出し、急速に西欧化、近代化することによって植民地となることを回避できた。しかし、西欧文明の衝撃に対する日本の対応もさまざまな成功と失敗があった。日本が西欧の先進的科学技术と近代的社会制度を積極的に導入し、短期間で欧米工業先進国に追いついたことは、工業化、近代化には西欧型以外にも多様な複合的な道がありうるということを西欧世界と非西欧世界の双方に示したという意味で成功であった。しかしその反面、日本がその西欧化の過程で西欧帝国主義国家を模倣して植民地獲得を目指そうとし、その伝統的な非イデオロギー国家の性格を忘れてイデオロギー国家への傾斜を強めるという失敗を犯したこともあった。

こうした成功と失敗の歴史の教訓に学び、それらをこれからのアジア・太平洋地域協力のための共通の文化遺産としていくことが日本、世界各国に求められている。諸文明の成功と失敗の経験を歴史化し、相対化し、総合化することを通じて、多様な諸文明の共存、複合の新時代を切り開くことができるのである。アジア・太平洋地域はこの共通の理念のもとに競争と協調を進めていくべきであり、また西欧社会も「西欧的偏見」を取り去って、非西欧世界と相互理解に眼を向ける必要がある。そのような中で「極東」(Far East)であると同時に「極西」(Far West)でもある日本は、さらに積極的に多様な文明、文化を結ぶ役割を果たさなければならないであろう。

． アジア・太平洋時代の到来

20世紀最後の「10年」(the last decade)である1990年代を目前にして、アジア・太平洋地域は新しい文明史的発展の可能性を明確に示し始めた。近代産業文明の限界を超える新しい文明史的発展の極は明らかに大西洋地域からアジア・太平洋地域へとその重心を移動しつつある。

この新しい文明史的発展の可能性は、これまでのさまざまな型の単一文明(Mono-civilizations)の限界を超える諸文明の共存と複合という意味において、これを新しい型の、多様な“複合文明”(Poly-civilizations)あるいは“多重文明”(Multi-civilizations)の誕生と呼ぶことのできるものである。

1980年代前半の先進工業国の経済成長率が平均2.3%、ECの経済成長率が平均1.3%に過ぎ

なかったのに対して、アジア・太平洋地域は韓国7.6%、台湾6.0%、シンガポール6.1%、香港5.7%、タイ5.3%、マレーシア5.1%、日本4.0%など、先進工業国平均の2～3倍の高い経済成長を継続している。この好循環の直接・間接の影響を受けて、中国もまた沿海地域の経済特区を中心に平均9.7%という高度経済成長を維持している。

豪州、ニュージーランドなど大洋州諸国も次第にアジア・太平洋地域との相互依存関係を強め、大西洋国家と太平洋国家、海洋国家と大陸国家の二つの二面性を持つ米国もアジア・太平洋地域との相互依存関係のなかに新しい経済発展を示すなど、西太平洋に面するユーラシア大陸の東岸から、中・南部太平洋に展開する太平

洋島嶼諸国，大洋州地域を経て，東太平洋に面する北米・中南米を含むアメリカ大陸の西岸にかけての広大な環太平洋の全域において，活発な経済的，文化的交流と発展がみられる。

米ソの緊張緩和と中ソ関係の改善は，朝鮮半島をはじめとする東北アジアの緊張緩和，インドシナ半島の平和と安定の回復，南アジア地域の安定と活性化への寄与などを通じ，アジア・太平洋地域の動向に全体として好ましい影響を与えることとなろう。韓国，台湾等のアジアNIEsと中国との経済交流の新展開，「一国二体制」という新方式により1997年に予定されている香港の中国大陆への返還もまたアジア・太平洋地域の将来にかかわる重要な実験となるであろうし，その帰趨は台湾問題の将来，中国の対外開放・改革政策の成否はもとより，今後のアジア・太平洋地域全体の平和と安定に複雑な影響を与えずにはおかないであろう。複雑な歴史のジグザグ・コースを歩むにせよ，長期的には中国はその多様な民族自治区，地方政府，地方文化の独自性，主体性を次第に強め，複数政党制を含む権力の分散，市場経済による企業の自主制の強化，地方分権，各民族文化の個性尊重のなかに「一国多体制」のゆるやかな連邦国家形態に移行していく可能性も予測される。「ベレストロイカ」と「グラスノースチ」を進めるソ連もまたアジアNIEsとの経済交流を積極化するなど，アジア・太平洋地域重視の姿勢を強めようとしている。

数世紀を越える長い停滞と混乱の時代を終えて，アジア・太平洋地域はいま1992年の欧州統合を契機として再活性化をめざす大西洋地域とあい携えて，これからの地球社会が必要とする新しい，第二の発展の極を形成しようとしているのである。この東と西の二つの発展の極をあたかも均衡のとれた楕円の二つの中心とするような形で，きたるべき21世紀の平和友好・平等互惠・多様調和・相互信頼・長期安定の真に新しい，全地球規模の国際秩序が人類史上はじめて創造されることとなるであろう。太平洋国家と大西洋国家という二重性を持つとともに，未

来の地球社会の縮図ともいえる多様性と開放性を持つアメリカ合衆国は，この楕円の二つの中心を結ぶ決定的に重要な存在である。アメリカ経済の再活性化と独自のアメリカ型“複合文明”のルネッサンスなしに，アジア・太平洋時代の到来も地球社会の再活性化もあり得ない。保護主義や地域ブロック主義の台頭に反対し，開かれた競争的相互依存関係の構築をめざす，太平洋をはさんでの新しい日米パートナーシップは，大西洋をはさんでの新しい米欧パートナーシップと共に，この均衡ある楕円の安定と発展を支える二大構成軸である。

アジアNIEsやASEAN諸国の経済発展や政治的安定への動きが，日米パートナーシップの存在による市場，投資，技術，教育，文化，安全保障等の面での緊密な分業と協業のネットワークがなければ成立し得なかったことも，そのことの例証のひとつである。これからの日米関係は単なる二国間関係の枠組みを越えて，従来以上にアジア・太平洋地域協力というより広い枠組みのなかでさらに成熟した，高次元のものに発展していかなければならないであろう。そのためには日米双方に改善すべき問題点が山積していると言わなければならない。

これからの日本は，決して自国のみの繁栄と安全という狭い閉鎖的視野のなかに生きるべきでないし，また生きることはできない。21世紀にむけての日本の役割は，非軍事経済大国という新しい型の平和文化国家の基本路線を堅持しながら，思い切った市場開放と内需拡大，経済・科学技術協力，地球環境問題への積極的取り組み，青年文化交流などを通じて，このアジア・太平洋地域の新しい文明史的可能性の実現のために積極的に協力しつつ，この地域ならびに世界との新しい相互依存関係のなかに平和的に共存・共栄しようとするものでなければならない。第二次世界大戦の悲劇の教訓に深く学んだ日本国民が，戦後自らの国家意思として定めた日本国憲法の前文の「いづれの国家も，自国のことのみに専念して他国を無視してはならない……日本国民は，国家の名誉にかけ，全力を

あげてこの崇高な理想と目的を達成することを誓ふ」という言葉は、いまこそさらに高らかに

掲げられなければならないものである。

・ アジア・太平洋地域の文明史的特質

アジア・太平洋地域は、地球社会の他のさまざまな地域とは異なる幾つかの文明史的特質を持っている。

アジア・太平洋地域の第一の特質はその文明の多様性にある。この地域には有史以来、仏教、儒教、道教、ヒンズー教、イスラム教、キリスト教、神道、各種の民俗信仰などの高度の宗教的多様性が存在しており、世界のほとんどすべての古典文明が複雑に混淆し、相互に影響を与えあい、独特の変容を遂げながら、それぞれの人種、民族に固有の民俗的・伝統的文化と重層的構造を形造ってきた。

こうしたいわば古典文明の多様性の基盤の上に、十五世紀以降の西欧化、すなわち近代西欧文明の衝撃がもたらした多様性がさらにその文化の近代的表層を覆っている。西欧世界（西欧にとっての「旧世界」、「旧大陸」）からみた場合、非西欧世界に属する「新世界」、「新大陸」として認識されることとなったアジア・太平洋地域は、十五世紀の地理上の発見、十八世紀末から十九世紀初頭に始まる産業革命以降、その全域にわたって近代西欧文明による西欧化、工業化、近代化の衝撃を受けることとなったが、その衝撃を受けた時期も、衝撃の受け方も、それに対する対応の仕方も民族により、国によりそれぞれに大きく異なっていた。それはアジア・太平洋地域の西欧列強による植民地支配の受け方の差異、民族独立の仕方の差異、旧宗主国との関係の差異となり、現在のアジア・太平洋地域諸国の経済発展段階の差異や経済社会体制の差異などの形をとって今なお深い歴史の刻印を残しているのである。

ECや東欧地域、中近東地域などをはじめとして他の多くの地域協力が、文化、社会体制な

どの共通性、歴史体験の同質性、経済発展段階の同時性などをほぼ共通の前提として成り立っているのと比較した場合、このアジア・太平洋地域の文化、歴史、経済社会体制、経済発展段階等々のあらゆる面にみられる複雑な諸文明の異質性と多様性は際立ったものというべきであろう。それはさまざまな色彩、材質の縦系、横系から重層的に織り上げられ、その上にまたさまざまな刺繍のほどこされた美しいつづれ織(Tapestry)にもたとえられるようなものである。その多様性の性質は石材・タイル・木材などのハードな素材からなるモザイク模様の多様性とも、ガラスなどからなるステンドグラスの模様の多様性ともその特質を異にする、よりソフトで繊細な多様性である。

アジア・太平洋地域の第二の特質は開放性にある。上述の第一の特質であるアジア・太平洋地域の際立った多様性は、世界の他の諸地域との多様な二国間関係、多国間関係を域内諸国にもたらしており、アジア・太平洋地域はこうした多様な国際関係に対して排他的であったり、それらと矛盾・対立するものであってはならない。アジア・太平洋地域は全体としても、この地域以外の諸国・諸地域に対して閉鎖的、排他的、ブロック的なものではありえないし、また絶対にそうあってはならないものであり、自由と開放を基本原則とするものでなければならない。その意味において、アジア・太平洋地域は保護主義や地域ブロック主義の台頭に反対し、競争と協調の最適均衡のなかに自由貿易体制を維持・発展させていくための新しいグローバルズの担い手とならなければならない。

一般に海洋は諸民族、諸文化の自由な交易を可能ならしめる「海上の道」を提供するという

面と同時に、諸民族、諸文明、諸文化を隔離することによって孤立的・個性的で多様な文明と文化の継承・発展を可能ならしめるという面を持っていた。交通・通信手段の発達はこの海洋の持つ短所を克服し、長所を助長する方向に作用している。海洋は「ボーダーレス・エコノミー」時代の自由で開放的な交流のネットワークを提供する新しい空間に質的に転換しつつあるのである。世界の多様な文明、文化の受容という点で開放的で寛容な特質を持つアジア・太平洋地域は、この面でも国際化時代の地球社会の新しいモデルたり得る可能性を持っているのである。

アジア・太平洋地域の第三の特質はその相互性にある。このアジア・太平洋地域の相互依存関係の複雑多様さは上述の第一の特質である多様性、第二の特質である開放性とも密接不可分に結びついた特質である。

それゆえに、その相互依存関係は単に産業構造面における垂直分業や水平分業などというような国際分業の次元の問題よりはるかに複雑なものであり、より深く文化や国民世論の構造や意識構造と結びついている。人類文明はこれまでである程度の同質性、単一性を前提にした相互依存関係を形造ることについては少なからぬ経験を積んできたといえることができる。

しかし地球社会が必要としている新しいグローバルイズムは、これまでの人類の諸経験をはるかに超えるような多様性を相互に承認、尊重するという基本前提に立って、多様なものの調和をめざす新しい質の、より自由で柔軟な相互依存関係である。しかもそれはこれまでよりも国境という障壁の低い、より開放的な条件のもとで構成される相互依存関係である。日米両国をはじめとする諸先進国の積極的な市場開放努力と経済・文化・技術協力、新興工業地域の投資・生産・輸出・消費の拡大循環メカニズムの形成と民主化の進展、発展途上国の改革・開放のための自助努力の三つを賢明に結びつけることによって、貿易、資本、労働、技術、情報、市場などのあらゆる面で、アジア・太平洋地域諸国間の協力をより高い相互依存関係に発展させていくことが必要である。そのことを通じて、アジア・太平洋地域協力はいわゆる南北問題と東西問題の同時解決に新しい漸進的・現実的・非イデオロギー的モデルを提供することができるであろう。

以上の多様性、開放性、相互性というアジア・太平洋地域の三つの特質は、アジア・太平洋地域協力に関する新しい理念の形成を求めている。

． 新しい“複合文明”(Poly-civilizations)の時代

本論文の冒頭で、われわれはアジア・太平洋地域における新しい文明史的発展の可能性を、これまでのさまざまな型の単一文明(Mono-civilizations)の限界を越える諸文明の共存と複合という意味において、これを新しい型の多様な、“複合文明”(Poly-civilizations)あるいは“多重文明”(Multi-civilizations)の誕生と呼ぶことができるのではないかと論じた。

ここにいう“複合文明”とは、梅棹忠夫氏の「“諸文明”の時代」(総合研究開発機構報告書

『1990年代日本の課題』所収)の概念とほぼ共通するものであり、現代文明における世界的規模での物質的生活様式の共通化、同質化傾向と精神的生活様式(文化)の多様化、異質化傾向という相反する傾向が緊張をはらみつつダイナミックに同時進行し、その結果、“多様なものの統合”(E Pluribus Unam)の原理が質的転換を遂げ、諸文明の多元的調和ないし融合の新しい型が出現してきていることを指す。普遍性への求心力と特殊性への遠心力との矛盾、

緊張，不安定のなかでの複雑微妙な均衡がこの文明史的ドラマを支配している。

ここで「文明」(Civilization)とは広義に「人間の生産技術・意識が進化し，高度な物質的・精神的生活様式を持つような状態」を指し，「文化」(Culture)とはこの「文明」のなかの特に「精神的所産」を狭義に指すものとして操作的(オペレーショナル)，実際の(プラグマティック)に理解し，使用するものとしたい。物質的と精神的，ハードウェアとソフトウェア，物質と情報というものが形式的に二分できないことはいうまでもないことであり，この両概念が相互に他を前提として成り立っている相対的概念であることは説明の要がないことであろう。また，近代西欧文明を支配したデカルトの合理主義，二分法的思考の限界が，近代を超える多様化，多元化の時代において根本的に再検討されなければならないようになってきていることも，諸文明の複合，融合，相互浸透の観点から極めて重要な論点である。しかし，これらの近代合理主義，西欧的思考方法の限界の理論的検討についてはここでは立ち入る余裕がない。これらの諸点については，ソフトノミックス・フォローアップ研究会報告書『高度情報社会のパラダイム』(大蔵省印刷局刊)を参照されたい。

第二次世界大戦直後の1947年に書いた論文「文明と文明とのあいだの遭遇戦」(『試練のなかの文明』，“Civilization on Trial”のなかで，歴史家のアーノルド・トインビーはつぎのように述べたことがある。

「未来の歴史家は，20世紀の大事件とは，西欧文明がその他の当時の世界のあらゆる社会に加えた衝撃にほかならないというのではないかと私は考えます。彼等はこの衝撃について次のごとく語るでありましょう—それはあまりにも強力であり，あまりにも浸透力に富むものであった，ためにその犠牲となったすべての人間の生活は一大混乱に陥る有様であった—一人一人の人間の起居動作，ものの見方，感じ方，信じ方まで，老若男女の別なく心のすみずみまでも動かし，単なる外面的な物質力—勿論それもあ

などるべからざる圧力を加えたとしても—の手の届かない人間の魂の琴線にまで影響を与えるものであった。現在を起点として僅かに西暦紀元2047年の将来から現代を振り返って眺めた歴史家たちは必ずやこのような言い方をするであろうと考えます。……(中略)……

紀元4047年までには，一侵略者としての西欧文明と，その犠牲者としての諸々の他の文明とのあいだの区別のごときは—今日でこそ大きくその姿を映しだしてはいるものの—おそらくは取るに足らない区別と見えてくるでありましょう。一方からの攻勢にむくいるにその反対勢力の攻勢が打ち続くとき，最後に生き残るものはただ一つの，全人類に共通の経験，つまり，みずからの地方的な社会遺産が他の諸文明の地方的遺産と衝突してこっぱ微塵に打ち碎かれ，しかるのちにおいてその廃墟からもえ出てくる一つの新しい生命—一つの新しい共通の生命—を発見するという経験でありましょう。紀元4047年の歴史家たちは語るでありましょう—キリスト教紀元千五百年から二千年までの時代に西欧文明が同時代の諸々の文明に与えた衝撃はその時代の画期的な大事件であった，なんとなればそれは人類を単一の社会にまで統合するための第一歩だったからと。彼等の時代になるまでにはすでに人類の統一性ということは，おそらく人生の基本的条件の一つ—自然の秩序の一部とさえ言えるもの—となっているでありましょう。」

トインビーの言う西欧文明の衝撃にともなう「文明と文明のあいだの遭遇戦」は，過去数世紀にわたってアジア・太平洋地域に変革と停滞，戦争と侵略の時代をもたらした。西欧文明の衝撃に対するアジア・太平洋諸地域の対応の仕方はさまざまであった。

しかし，トインビーの言う2047年や4047年を待たずして，20世紀後半のアジア・太平洋地域における西欧文明と非西欧文明の活発な相互作用と反作用，複合，融合，浸透の動きは，近代産業文明の西欧的限界を越える，ある新しい型の「複合文明」の形成をもたらしつつある。そ

れは特定の単一文明とは異なり、地球社会の将来により適合的な、多様な諸文明の最適「複合」—その最適「複合」の方法もまた地域により、文化により多様であって、決して単一ではない—から成るものである。

アジア・太平洋地域の活性化と経済発展は在来型の工業化、近代化、西欧化によってもたらされたものではなく、こうした異質、多様なものの文明史的融合のエネルギーによるものであることを見落としてはならないであろう。それは特定の文明の型の絶対化ではなくその相対化であり、特定の単一文明の全面肯定でも全面否定でも、単純な「排外・国粹」でも「排外・模倣」でもない、中庸の第三の道にほかならない。多様な諸文明のそれぞれに固有の短所を改め、長所を伸ばすような形で、人類文明の諸遺産の発展的複合のための先導的試行がそこで進行しているのである。

平川祐弘氏が『西欧の衝撃と日本』のなかで鋭く指摘しているように、西暦紀元前後にギリシャやローマ帝国の人々がギリシャ語やラテン語で「アジア」(to go out を意味する語より派生)と呼んだとき、かれらが思い浮かべた土地は地中海の東に出て行くときそこに広がる未知の辺境のことであり、誰ひとり日本や中国などを思い浮かべはしなかった。つまり、「アジア」とは元来、アジア人ではなくヨーロッパ人が行った地理上の分類に過ぎないものであり、その場合、「アジア」はユーラシア大陸の非ヨーロッパ地域を指すという消極的な定義以上のものではあり得なかったのである。それはウラル山脈、ボスポラス・ダーダネルス両海峡の東に広がる非ヨーロッパ地域全体を指すものであった。やがてヨーロッパ人の視界が地理的に拡大するにつれて、アジアは「近東」「中東」「極東」などと次第に細分化されていくこととなった。

同様に「太平洋」がヨーロッパ人の認識の枠組みのなかに登場してきたのも、マゼランが南アメリカ南端のマゼラン海峡を通過してこの初対面の海を「太平洋」(The Pacific Ocean)と

名付けた1520年以降のことであった。つまり「東洋」という言葉と同じように「アジア・太平洋地域」とは歴史的には、「西洋」ないしは「西欧」から見た「非西欧世界」の総称にほかならなかったのである。

この際、重要なことは、西洋ないしは西欧がギリシャ・ラテンの古典文明とキリスト教文明を継承して、一つの比較的等質な単一の文明圏を構成していたのに対して、東洋ないしはアジア・太平洋地域にはそのような等質、単一の文明史の実体は存在していないことである。比較的まとまった文明圏として、儒教文明圏、仏教文明圏、イスラム文明圏、ヒンズー文明圏、日本文明圏などを挙げることはできるが、これら全体を包括するような等質、単一の東洋文明や東洋文化などという実体は存在しないのである。かつて津田左右吉が『支那思想と日本』(1936年)のなかで、比較的等質、単一の文明圏からなる西洋と異質、複数の文明圏からなる東洋を同一視する結果になるような、「東洋と西洋」といった呼称は非常に誤解を生じ易いと警告を発したのもそのためである。その意味で岡倉天心が発した「アジアは一つ」というメッセージは、この地域がとりわけ産業革命以降の欧米列強の帝国主義的進出によりひとしく西洋の圧迫を受け、受け身の立場に立たされたという共通性に着目している限りににおいて一定の妥当性を持つものとも言えるかも知れないが、根本的にはアジアの多様性、西欧文明の衝撃を受けた非西欧文明圏の複雑な多様性を無視してしまう結果に導くという点で誤ったスローガンでもあった。

その幸運な地理上の位置に助けられて、先に西欧文明の衝撃を受けた南アジア地域ならびに他の東アジア地域諸国のたどった悲劇的運命から数多くの教訓を引き出すことができた日本は、十九世紀末の明治維新を通じて、アジア・太平洋地域で最も早く積極的な対外開放・改革路線を採択するとともに、急速に西欧化、工業化、近代化することによって西欧列強の植民地となることを回避するという逆説的戦略を採用

することができた。

かつて内村鑑三は『日本及び日本人』のなかで明治維新の文明史的意義に触れてつぎのように論じたことがあった。「思ふに、明治維新は、二つの異なる文明の形式を代表する二つの民族が相互に名誉を毀はざる立派な交際をなすに至れる—「前望的(プロスペクティブ)の西洋」がその無秩序な進歩を抑制せられ「回顧的(リトロスペクティブ)の東洋」がその惰眠より覚醒せしめられたる—世界歴史の一劃期点としての意義を有するものである。その時以来、西洋人も東洋人もなく、ただ万人が人道と正義とに於いて一たるべきであった。日本の覚醒せざる以前は、世界の一方は他の一方に背を向けていた。しかし、日本によりて、また日本を通して、両者は面々相對するに至った。日本の解決すべきもの、また現に解決しつつあるものは、欧羅巴と亜細亜との正しき関係といふ問題である」

数世紀にわたる西欧文明の衝撃に対して、アジア・太平洋地域の国々が示した対応はさまざまに異なるものであった。その多様な対応の全体を通じて、20世紀の歴史はヨーロッパとアジア・太平洋地域との「正しき関係」という問題、つまり地球社会における多様な諸文明の尊厳とその正しき関係という問題に対する答えを模索しつつけてきたのだと考えるべきであろう。日本のみが唯一正しい道を選択し得た訳でもなかったし、欧米諸国のみが誤りなき選択を一貫してきたという訳のものでもなかった。日本以外の他のアジア諸国の選択こそが正しいものであったという訳にもいかない。諸文明、諸国民のすべてがあるいは過ちを犯し、あるいは部分的に正しい選択をなし得たというのが歴史の真実というべきなのである。そうだとすればなおさらのこと、歴史の教訓に虚心坦懐に学ぶということが、この文明史的転換の時代にこそ必要とされるのではないだろうか。

過去、数世紀に及ぶ西欧文明の衝撃に対する日本の対応の仕方のなかにも、さまざまな成功と失敗があった。

よく知られているように、日本は西欧の先進的科学技術と近代的社会制度を積極的に導入するとともに、伝統文化を巧みに継承・発展させることにより、独自の日本型のインダストリアルリズムへの道をたどることとなった。明治維新以来ほぼ1世紀を経て、日本が欧米工業先進国段階に追いつき、追い越すことができたという歴史的事実は、工業化、近代化には西欧型以外にも多様な複合的な道があり得るということを示すこととなったという意味において、一つの成功であったといえるであろう。

反面、日本がその西欧化、工業化、近代化の過程において西欧帝国主義国家を模倣して植民地獲得を目指そうとし、その伝統的な非イデオロギー国家の性格を忘れて一元的かつ祭政一致型に近いイデオロギー国家への傾斜を強めた時に、日本はアジア・太平洋地域に対する遅れてきた帝国主義国家として大きな失敗を犯すこととなった。また、日本文化・文明の特殊性を一面的に強調し過ぎて偏狭なナショナリズムに陥ったとき、日本文化・文明の長所は、かえってその符号をプラスからマイナスに変質させて致命的な短所となり、人間関係を大切にすよき伝統は逆に途方もない無責任体制に急変し、日本を誤れる戦争と侵略の道に突入させてしまった。

日本軍の六つの作戦の失敗分析を通じて、日本の政治文化の弱みを分析した『失敗の本質—日本軍の組織論的研究』(戸部・寺本・鎌田・杉之尾・村井・野中共著)は、あいまいな戦略目的、短期決戦の戦略思考、主観的で「帰納的」な戦略策定、空気支配、狭くて進化のない戦略オプション、アンバランスな戦闘技術体系の五つを戦略上の失敗要因として挙げ、人的ネットワーク偏重の組織構造、属人的な組織の統合、学習を軽視した組織、プロセスや動機を重視した評価の四つを組織上の失敗要因として列挙しているが、残念ながらこうした弱点は今日なお、日本社会のさまざまな組織にほぼ共通に観察されるのである。

その分析はここでの主題ではないが、こうした成功と失敗の両面が複雑に絡み合った歴史の教訓に深く学び、これからのアジア・太平洋地域協力の貴重な共通の文化遺産としていくことが厳しく日本をはじめ世界各国に求められている。残念ながらこれらの点において、人類文明にはまだなすべきことが余りにも多く残されたままである。

諸文明の成功と失敗の多様な経験を真に歴史化し、相対化し、総合化することを通じてはじめて、人類はかつての「文明と文明の遭遇戦」の時代を越える多様な諸文明の共存、複合の新時代を切り開くことができるのである。アジア

・太平洋地域はこの共通の理念のもとに競争と協調を進めていくべきではないか。

そのためには西欧社会もまた、西欧文明、文化のものの見方、考え方、思考の枠組みや価値体系、理論モデル、風俗・習慣などを唯一・絶対の基準としてしまいがちな「西欧的偏見」「われらが眼の梁」(G.ミューラー『アジアのドラマ』)を取り去って、眼を多様な非西欧世界との相互理解と相互信頼に向ける必要があるであろう。「極東」(Far East)であると同時に「極西」(Far West)でもある日本は、人類の多様な文明、文化を結ぶ役割をさらに積極的に果たさなければならないであろう。